

詩に刻むキムチ——「在日」詩人の描く食・ジェンダー・差別

岩田＝ワイケナント・クリスティーナ

(大崎晴美・岩田晋典訳)

はじめに¹

テリー・イーグルトンは、食べ物について一つ確かなことは、それが単なる食べ物にすぎなかったためしは一度もないということだ、と語っている (Eagleton 1988, 204)。当然ながら食べ物は人間の生存に不可欠であるが、食べ物には明らかに、栄養なる近代的な概念だけでは説明できない象徴的な側面がある。何を、どのように、誰と一緒に食べるのか、食べ物についてどのように感じているのかといった事柄は、深くアイデンティティの問題と結びついており、人間社会を理解する際のカギとなるものである (Sceats 2000, 1)。端的に言えば、食べ物と食べる行為は、社会的・文化的な実践であり、それは表象においても同様である。

本論文は在日朝鮮人文学、特に詩に焦点を当てている。以下論じていくように、このジャンルにおいて、食べ物、料理、食べるという行為の描写は多層的な意味を持つ。他のマイノリティ文学や移民文学で食べ物と言語の問題が前景化するケースと同様に、「在日」文学のテキストにおける食の表象は、単にリアリズムを持たせるためのものではなく、むしろ、在日コリアンの現在と過去を結びつける絆の象徴として、また日本との関係を示す指標として用いられている。

食べ物と食の実践がエスニック・マーカーとなることを思えば、日本で在日コリアンに対してなされてきたネガティブなステレオタイプ化に、在日コリアンが食べるとされる(あるいは、食べるとされた)料理や食料品が頻繁に含まれるのも、さほど驚くには当たらない。また、「在日」文学では登場人物と食べ物との関わり方が微妙なものになりやすい。最も極端な例はおそらく、李良枝^{イ・ヤンジ}の1982年の小説『かずきめ』(李、1993年)の主人公女性である。彼女は、自身が在日コリアンであり女性でもあることに起因するトラウマの経験と折り合いをつけることができず、過食嘔吐などの自傷行為を行う (Young 2016, 122–44)。

しかし、象徴的な含みの多い摂食障害はさておき、タクアンやキムチのように特定の民族に結びつけて考えられる食べ物は、民族間の境界線をはっきりさせる機能とぼかす機能の両方を同時に担うことが少なくない。例えば、

1

本論文は、ドイツ・トリア大学におけるドイツ研究振興会 (DFG) の Centre for Advanced Studies 「変容する現代詩」(FOR 2603)の支援を受けたものである。

金真須美の『メソッド』（金、1996年）に登場する日系アメリカ人女性の例がある。彼女は、移民一世だった母親がいつも冷蔵庫に入れていたタクアンを大嫌いだったことを思い出し、「イエロー・スタッフ（黄色いへんなもの）」と呼ぶ。こうしたタクアンへの嫌悪感は味やにおいとは関係ないものであり、むしろ、彼女が白人ばかりの環境の中で「黄色人種」として経験してきた違和感、人種をめぐる彼女が抱えてきた不安感から生じたものである。それと同様に、主人公の在日コリアン三世は、文化と言語の上では日本人である自分と、持って生まれたコリアンとしてのアイデンティティとを和解させることができない。そのため、結果的に自殺することとなる。彼女は在日であるがゆえの自己嫌悪をキムチに投影する。

モスグリーン色の扉を開ける。強い臭気が鼻を打つ。匂いのついた冷気をまとった青い壺を胸に、息を整え扉を閉める。朝日の差し込む人工大理石の真っ白なキッチンカウンターにそれを置く。注意深く、口から息を吐き出し、壺を開ける。臭気が目に沁みる。青い壺の底で、赤い波に体を洗われた白い裸体。ひっそりと身を横たえている。遠い昔、玄界灘を越えてやって来た祖先が残していった生きた屍。息を殺し、奥歯を強く噛んだまま、それを乾いた木のまな板の上にのせる。裸体は鮮血をしたたらせながら板の上で放心している。手に匂いがつかないよう、厚手のゴム手袋をはめ、左手に割り箸を持って、胴体の端を押さえる。

右手に持った包丁で、白菜の根元、頭をまずはねる。それは、しっかりとした手ごたえで、右手に重みを返す。

コトリ。とかわいた音。

今度はたて続けに、コトリ、サコリ、と等分にその体を切り離していく。意思とは無関係に唾液が溜まり、両耳の付け根の下が抓られるように痛くなる。

（金、26-27ページ）

この場面では、キムチの塊を刻む行為が、腐敗した死体の切断になぞらえられており、包丁は検死解剖の道具となる。『メソッド』では、タクアンとキムチという二つの漬物が自分の両親（または祖父母）の祖国と結びついており、日系アメリカ人の登場人物と主人公の在日コリアンがそれぞれの食べ物を拒絶している。というのも、移民の文化が支配的な文化言説において劣等と見なされる場合、その伝統食品を食べることは当該文化を身体に取り込むことを意味するからだ。タクアンとキムチは、それなりの栄養面での機能を持つとしても、登場人物たちの経験する不快感とはおよそ関係なく、彼女たちの置かれたそれぞれの文脈において劣等性を持つものと見なされている。たしかにキムチの見た目においては主人公の食欲をそそのめるのだが、彼女が

この身体的反応を自分の体に流れる「朝鮮の血」の証しととらえるために、むしろ彼女の苦痛を掻き立てるだけである。そのため、主人公が在日コリアン的なものに向ける攻撃的態度は自分自身への攻撃にもつながるのであり、その後の自殺を示唆するものとなっている。

ここでは、朝鮮からの祖先が遺した「生きた屍」があからさまにジェンダー化されているわけではない。だが、滴る血、体がむき出しの傷つきやすい状態にあり、さらに暴力に晒されてされていることからすれば、連想されるのは女性の身体の方であろう。そしてキムチを刻む主人公も女性である。このジェンダー性は単なる偶然と考えるべきではない。というのも、「在日」文学では、食べ物の描写、とりわけその物質的な部分の表象が女性というジェンダーと結びつけられることが珍しくないし、また、虐待される女性や虐待する男性の描写も頻出するからだ。これらの女性の登場人物にとって家庭は幸せの場でもあれば、抑圧の場でもある両義性を持つ場所となっている。

食べ物に関して言えば、食事の支度に責任を負うのは女性のみである。先の『メソッド』の引用箇所は、娘が暴君のような父親のためにいやいやキムチを支度する場面である。一般的に女性は「どんな料理を作ろうかと考える時に、必ずしも自分の好みで決める」わけではなく、家族内での不平等な力関係のせいで、「伝統的に男性の好みが家族の誰よりも優先されてきた」というラプトンの指摘が思い出される (Lupton 1996, 59) [ラプトン、1999年、106ページ。一部訳改変]。

以下で検討する二つの詩に見られるように、女性作家は食べ物や身体化を極めて具体的に扱うことが多い。対照的に、男性作家は食べ物や食べる行為に言及しないか、食べ物に関わるより抽象的な事柄に関心を寄せる傾向が強い。この背景には、女性が食べ物を生産する側で男性がそれを消費する側だというジェンダー分業が隠れていると想定できる。

アメリカの「在日」文学研究者メリッサ・ウェンダーは次のように述べている。「登場人物たちが日本文化や在日文化に関わる仕方はジェンダーによって決定されている。隠喩やテーマという点でも、ジェンダーごとに作品を区分することができる」。さらに、「男性作家と女性作家ともに、現実生活の体験に基づいてフィクションを書く傾向があるが、男性が自分の母親の体験の目撃者として書くのに対して、女性は自分自身の体験について書く」という (Wender 2005, 17)。

キムチのような民族的にコード化された食べ物が散文文学で象徴的な意味を担わされることは頻繁にあるが、食べ物と食べる行為が中心的な役割を果たすのは、むしろ詩においてである。以下の分析では、^{そうしゅうげつ}宗秋月 (1944年–2011年) と ^{チヨン・チャン}丁章 (1968年–) という二人の詩人の作品を取り上げ、キムチという食べ物、ジェンダー、民族性という三者の関係性について論じてみよう。

著名な在日女性詩人である宗と、彼女より一世代若くやや知名度の低い丁はともに、キムチを在日コリアンの民族性を表す象徴として用いている。二人の詩人は、同化と排除の葛藤を描き、自分たちのルーツである想像上の国(朝鮮)と、生まれ育った国(日本)の間でアイデンティティが揺らぐさまを表現している。けれども、それと同時に、前者がキムチをジェンダー化された文化遺産として賛美するにとどまらず神話化しさえする一方で、後者は、そのようなものとしてのキムチに抗うというように、大きな違いも確認できる。

食と母性を神話化する——宗秋月の「キムチ」

1944年に佐賀県で生まれた宗秋月は、在日女性詩人としては最も知名度の高い作家である。本名は宋秋子^{ソン・チュジャ}、日本名は松本秋子である。両親はともに済州島^{チェジュ}からの移民で、最初はコリアン居住区として有名な大阪・猪飼野に住み着いたが、その後は佐賀県の小さな町に身を落ち着けることになった。宗は、その町の中学校を卒業したものの、職を見つけることができず、身一つで再び猪飼野に移り住んだ。やがては自分のバーを開くようになるのだが、移住当時はまだ一五歳で、小さな工場で働くなどしていた。

宋が詩を書き始めたのは猪飼野移住後すぐのことであり、二一歳の時には大阪文学学校への入学を許可されている。1971年、宗秋月というペンネームで、大阪の小さな出版社から最初の詩集を出版すると、批評家から大きな賞賛を受け、その後東京の出版社からも出版されることになった。しかしながら宗は、全生涯を通じて文筆だけで身を立てていくことはなかった。

ここで論じる詩「キムチ」は、宗秋月の最初期の詩の一つであり、よく再版された作品である。初出は1971年だが、大阪文学学校に入学する以前に既に書いていたらしい。「キムチ」は自由詩の形式で書かれており、二五行、二連で構成されている。第二連は二行しかなく、その部分だけ直接話法で書かれている。

キムチ

かわらのうねりに

朝がくると

女は壺の中から キムチを出して

シャク シャク 刻む

むかし むかしの そのむかしから

変らぬ女の日々の仕草よ

土くれの野の

あおい匂い
 にんにくの匂い
 白い葉にとうがらしの染まった
 まっかなキムチ
 くちをゆすぐ息子に
 チューイングガムをかむ娘に
 食卓の上のキムチは
 それでも
 食指をふるいたたせ
 胃袋までをも
 まっかっか
 ひりひり ひりひりと染めてゆく²
 女の指も まっかっか
 朝ともなれば シャクシャクと
 庖丁の先から
 ふるさと刻んで

 〈おまえたち
 起きなさいよ〉

第一連は、明確な語り手がないまま展開する。そのため、第二連に「起きなさいよ」という呼びかけが出てくるのはいささか唐突に感じられる。突然眠りから覚めたように、読者は一瞬、誰が誰に声をかけているかわからなくなり、第一連は夢か現実かの区別もおぼつかなくなる。しかし、注意深く読んでみると、「キムチ」の語り手が在日コリアン女性で、十代と思われる子供たちの母親であることが判る。家族の朝食の支度をしている間に、自家製のキムチの塊を刻みながら、第一連で描かれている夢想到に浸っていたのだが、「くちをゆすぐ息子」と「チューイングガムをかむ娘」に向けられている「起きなさいよ」という呼びかけで空想が唐突に終わる。

この詩は朝鮮文化の物質的な再生産と、この再生産のプロセスの中でキムチと女性の双方が果たす役割を描いている。テキストの第一行は、時間を遡って私たちをはるか昔にまでいざなう。「かわらのうねりに」の行全体がひらがなで書かれていることに注意したい。そのために、ここでの「かわら」が「瓦」を意味するのか、あるいは「河原」を意味するのか、曖昧になっている。すなわち宗秋月は、わずか一行の中に「瓦のうねり」と「河原のうねり」という二重の意味の幅を持たせることで、ステレオタイプの朝鮮の村のイメージを呼び起こしている。そこでは、伝統的な家屋の前にキムチの入った大きな壺が列をなして、清らかな小川の傍でのどかに憩うように並んでいる。この

2

土曜美術社出版販売から2016年に刊行された『宗秋月全集』では、この行の二つ目の「ひりひり」が「ひりり」になっているが、それ以前に出版された宗の第二詩集『猪飼野・女・愛・うた——宗秋月詩集』や、参考文献欄に示した『在日コリアン詩選集』では、「ひりひり」が二回繰り返されている。

純粋無垢なアウラは、黒々とした土とにんにくの「あおい匂い」や「むかしむかしの　そのむかしから／変らぬ女の日々の仕草」という表現を通じて、強調されている。また、朝ごはんの支度をする所作を「女の仕草」と呼んでジェンダー化することによって、キムチを刻む行為を単なる個人の日課以上のものへと、言い換えれば、在日コリアン女性であることに深く刻み込まれた営みへと変えている。

キムチは朝だけではなく、朝昼晩の毎食出されるおかずだ。第二行と第二一行で朝の時間だと繰り返すことによって、食事の支度が毎日繰り返されるルーティンワークであることが表されるだけでなく、そもそも朝鮮文化の継承において女性が果たす役割として重要であることが強調される。したがって、この詩の語り手は、単に子供を育てる親である以上に、祖国から離れて朝鮮人の子供を育てるという務めを負う母親なのである。子供たちも、朝鮮人のステレオタイプの一つ「キムチの匂い」消すのに躍起になるが、味には抗うことはできない。

食べるという行為は、そもそも外部にある物質を身体の中に入れるということであり、それゆえに〈自己〉の観念と分かち難く結びついている。「キムチ」では、食事のたびに“在日コリアンとしての民族性”が子供たちの中に着実に再生産されることが表現されている。この詩よりもずっと後に書かれた金真澄の小説では、朝鮮の食べ物の摂取と在日コリアンの血の間の、逃れられないとまでは言わずとも宿命的ではあるような強固なつながりが描かれているが、「キムチ」では、そうしたつながりが、キムチの鮮やかな赤い色への言及を繰り返すことを通していっそう強められている。宗秋月はここで、女性の身体と食べ物そして消え去りつつあるローカルな在日文化の間に象徴的な関係を表現しており、そうすることによって生物学的な再生産と文化の再生産の両方に携わるという最も重要な役割を女性に担わせている。

だが、そこに痛みが垣間見られることも無視できない。キムチを支度し、食べることは朝鮮文化の継承であり、文化的再生産である。それ自体は痛みを伴うものではないが、「まっかっか」なキムチの赤からは血が連想され、文化の再生産と対をなす生物学的な再生産、つまり出産が想起される（Wender 2005: 100）。すなわち、この詩から感じられる痛みは、出産の苦しみにも結びついている。

けれども、この詩に表れている痛みは、出産のような比較的短い間の激痛ではなく、「ひりひり」という語感が示すように、むしろ長時間に渡って続く感覚の方だと考えるべきであろう。後述するように、この詩は全体として、切り刻む擬音語によってリズムをつけられているが、第一連の最後の二行で、換喩によって祖国と等置されるキムチ（祖国）が包丁で切り裂かれてしまう。「キムチ」が書かれた当時の在日コリアンの場合、「ふるさと」は朝鮮半島の

特定の町や村、あるいは祖先の祖国としての朝鮮半島一般を指しうる。このため、「ふるさと」というノスタルジックな言葉と「刻む」という動詞の組み合わせは、植民地支配や南北朝鮮の分断、祖国から引き離された在日コリアンの苦しみといった、幾多の苦難の記憶を呼び起こす。とりわけ在日コリアン固有の辛い[・]苦しい経験があり、それは辛い[・]唐辛子入りのキムチのように、身体[・]の内部で焼け付くような感覚へと変わるものである。

「キムチ」は、視覚(色)、嗅覚(にんにく、土)、味覚(辛い唐辛子、にんにく)、触覚(痛み)、そして聴覚という五感のすべてに訴える詩である。物理的ならびに隠喩的な痛みについてと同様に、この詩の与える聴覚効果も複数の意味の層に結びついている。第四行と第二一行に出てくる「シャク シャク(と)」という擬音語は、白菜が切られる音を表すために用いられている。こ「シ」の音は少し形を変えて第五行に再び現れる。この行では、第三行・第四行に挿入された言葉の間のスペースも繰り返されているが、この構造面での模倣を見過ごすべきではない。また、第五行の「むかし むかしの そのむかしから」は、意味レベルでは刻む行為と無関係だが、聴覚レベルでは「シ」という音節の繰り返しが印象的に私たちの耳に響いてくる。つまりこの行では、前行の構造と擬音語を模倣することを通して、痛みや苦しみ、辛さの歴史の中で女性がキムチを刻んできた音が反復されていると考えることができよう。

聴覚効果は、白菜を切り刻む記述以外にも見出すことができる。宋はキムチの色を「まっか」だけではなく「まっかっか」とも表現している。鮮やかな赤という意味であれば、「まっか」(あるいは単に「赤」)で十分だとも言える。けれども、詩の後半では「まっかっか」というフレーズが繰り返し現れる。このスタッカートのような促音の連続は、包丁がまな板に当たる音を思わせるものである。ここでもまた聴覚的な効果が詩の核心部分と関係している。それは在日コリアンの「血」とキムチの双方に共通する赤い色、いわば生物学と文化のコンピネーションである。

このように、詩が描き出す感覚的な風景を通して文化の再生産とその身体性が表現されており、こうしたことのすべてが、色濃くジェンダー化されている。この詩が書かれた当時の在日コリアン社会は今日よりも家父長制的であったと言ってもよからうが、この詩の中に父親が不在であるのは興味深い。男性が家長であり養い手として振る舞う家父長制的な家庭の中で、「キムチ」は父親の存在を捨象し、食べ物の与え手である母親の役割だけにもっぱら焦点を当てている。

また、この詩の構造によって、母親の役割はさらに明瞭になる。第一連のはじめと終わりの各五行に目を向けてみよう。最初の二行と最後の二行に接する部分はともに、言葉の間に空白のスペースを開けた三行で構成されている。この二つの三行は明らかに対応しており、二箇所を一緒に読むと、まる

で神話的な女性の空間が一定のリズムとともに流れている感覚を覚える。この空間の中で女性は、食べ物と生命を生み出す「壺」に喩えられる。宗は、こうした本質主義的手法によって、母系を通じた文化の継承を創造している。ウェンダーは宗の著作について、母性を崇高な美の対象として描き出す身振りが特徴的だとし、さらに、現実の在日コリアン文化において女性が明らかに従属的な地位にあるのを考慮にいれば、この詩が書かれた当時、「朝鮮文化の連続性を保証してきたのが朝鮮人女性の力と母性だったという主張は革新的なことだったかもしれない」(Wender 2005, 103)とも述べている。

それと同時にウェンダーは、“女性の力”を生物学的に描くことの危険性も指摘している。というのも、そこには「性差別主義的な抑圧の要となる砦を再確認してしまう恐れがある」(Alcoff 1988, 414)からだ。その「砦」とは、内なる女性性が存在するという信仰であり、その信仰にしたがわなければ、その人は劣っているかニセモノの女性だと思われてしまう (ibid.)。ウェンダーは、こうした角度から見れば、宗による在日コリアンの母親の賛美は「フェミニスト的にすら見えない」と語っている (Wender 2005, 103)。その場合、母親が食物を与える行為は、むしろ在日の母親たちを苦難の生涯へと追いやるものなのであって、虐待を行う夫への抵抗意識を養うものにはなりえないのである。

スティグマからライフスタイル商品へ——ジョン・デヤン 丁章の「コンビニにキムチ」

丁章の近年の作品「コンビニにキムチ」も、キムチを真正面から扱う詩である。丁は宗秋月より一世代若く、1968年に京都で在日コリアン三世として生まれている。四冊の詩集を出版しており、そのうちの第三詩集『闊歩する在日』(2004年)に「コンビニにキムチ」が収められている。彼の作品はいくつかのアンソロジーに収録されているが、宗秋月ほど批評家からの注目を集めておらず、学術的議論も限られたものにとどまっている。

「コンビニにキムチ」は、長さの異なる七つの連に分かれた五一行で構成されている。宗秋月が母系を通じた文化継承を描き出すのに対して、丁章は神話的空間とつながろうと試みたりはしない。彼の詩は、いまここに深く根を下ろしている。しかしながら、時間の経過は彼の作品においても重要である。ただ、その重要性はより具体的で限られたものになっている。

「コンビニにキムチ」は、宗秋月の「キムチ」が書かれたころには珍しいものではなかったキムチのネガティブなイメージと、その後の二、三十年間に進んだキムチの商品化とを対比させている。このコントラストを明確するために、二項対立がいくつも用いられているが、キムチのスティグマが消えた

現在でもネガティヴさが完全に払拭されたというわけではない。というのも、キムチ人気への「おどろき」と「安堵感」は、キムチのスティグマがあってはじめて抱きうるものだからだ。

コンビニにキムチ

どの街のいたるところ

コンビニのショーケースに

クサイとカラいと

ついこのあいだまで

忌み嫌われてきた

キムチが

グリーンサラダと

同じ棚に

並べられ

売られているところへの

おどろき

コリアンタウンへ

求めてゆかずとも

キムチが

どの街なかでも

すぐ身近に

ありふれていることの

奇蹟

普段化された

キムチに

守られるような

救われるような

励まされるような

安堵感

差別の

記号で

ありえなくなった

キムチで

日本と韓国が

ザイニチの頭越しに
商戦を
くりひろげる
その抜け目ない時代への
惜しめない称讃と
うらはらの憂鬱

キムチ一つのこと
おびえ
もだえ
くるしんでいた
ザイニチの記憶

死にぎわでの失笑を経て
結晶と化した
被差別意識への
郷愁

何事でもなく
コンビニにキムチ
そのあたりまえの
複雑さと
ザイニチの
ただならぬ
感慨

差別の象徴からヘルシーな食品へと、キムチは変貌を遂げたが、その変化において最も印象的なのは、キムチから民族的な含意がほぼ消失したという点である。昔は、キムチはコリアンタウンでしか買えない食品であり、コリアンタウン自体もいくつかの都市にしか存在しなかった。だが、こうした空間的な制約はもはや無いに等しい。キムチは、コンビニの棚に置かれたことによって、コリアンタウンをぬけ出し、日本全国にまで広まっていった。これは、キムチが一般的な日用品の範囲に入ったことを意味している。二〇世紀の最後の四半世紀には、キムチは徐々に日本の食卓の定番としての地位を獲得した。

1970年代半ばまで、キムチは一般に「朝鮮漬」と呼ばれていた。キムチが食料品として市民権を得ると同時に「キムチ」というハングル語の名称が

広まったのは、加工食品メーカー・桃屋が「キムチの素」を考案した1975年以降のことである。「キムチの素」はどんな料理にでも簡単に加えることで、発酵プロセスの手間を省くことができるようになった。今でも人気を誇るヒット商品である。面白いことに、この製品の開発にインスピレーションを与えたのは韓国のキムチではなく、朝鮮戦争の余波として生じたアメリカでのキムチ人気であったという（産経新聞、2017年3月23日）。だとすれば、1970年代という早い時期に、すでにキムチは朝鮮文化の影を失いつつあったとも言える。しかし、その13年後の1988年のソウルオリンピックはキムチ人気のもう一つの起爆剤となり、全国のスーパーマーケットはキムチを「本物」と銘打って店頭に並べ始めた。このようにキムチが格段に手に入りやすくなったことが、1986年に日本を席卷したいわゆる「激辛ブーム」（湖池屋、2010年）と相まって、1990年代のキムチの売り上げの大幅な増加につながった。

1990年から2000年までの間に、日本でのキムチの生産量はほぼ四倍に増加した。その一方で、韓国からの輸入量は3,432トンから30,000トンへと急増した。1999年から2000年までの間の輸入量の伸び——15,000トンから30,000トンへの増加——はとりわけ目覚ましかった。2000年には、日本で生産された（また消費された）全種類の漬物のうちで、浅漬（22,500トン）、たくあん（90,6000トン）、福神漬（60,500トン）、梅干し（40,300トン）といった日本の伝統的な漬物を大きく引き離して、キムチが第一位の座に輝いた。キムチは、当時最も人気の高かった漬物というだけでなく、豚キムチやキムチ鍋といった料理の材料でもあり、これらの料理は現代の日本食の代表的なメニューとなっている（Cwiertka 2006, 153）。

食品需給研究センターの統計によれば、キムチは1999年には日本で生産量トップの漬物になった。キムチの人気は日韓両国が共同開催した2002年のFIFAワールドカップの際にピークに達し、2003年と2004年に日本を席卷したいわゆる韓流ブームの際にも好調をキープしたものの、それ以降は下降線をたどっている（産経新聞、2017年3月23日）。キムチが初めてコンビニで販売されたのは厳密にはいつだったのか、突き止めることができていないが、キムチの売り上げのピークが全国のコンビニの店数の大幅な増加と同時期であることを考えると、2004年に丁章の詩が出版された時には、「コンビニのキムチ」だけでなく、コンビニそのものを日本全国どこでも目にすることができるようになっていたと想定できる。

だが、この詩の中で空間関係が重要性を持つのは、コリアンタウンとコンビニが対比される場面だけに限らない。宗秋月の詩の場合と同様、丁章の詩もまた、民族的な「他者」としての立場から書かれている。しかし、宗の

「キムチ」においては、朝鮮半島の分断や、祖国から離れたことで引き起こされる苦しみが描かれているからと言って、日本に住むことで朝鮮半島の文化や生活と疎遠になったという意味が込められているわけではない。むしろ先に論じたように、猪飼野を舞台にした宗の文学において、存在が希薄なのは日本の方である。対照的に、丁章の詩の語り手はしっかりと日本に根を下ろしている。かろうじてコリアンタウンが、朝鮮文化とのわずかなつながりを示しているのであるが、そのコリアンタウンでさえ地理的にも、またおそらく感覚的にも遠く離れたものとなっている。

だとすれば、にんにくや唐辛子といった材料によってキムチを言い表す宗秋月とは異なり、丁章が偏見のフィルターを通してキムチを「クサイとカライト」と形容しているのも驚くには当たらない。キムチが「差別の／記号で／ありえなくなった」今でさえも、丁はキムチを再評価しない。この詩には本質主義的な“血”も“土”も姿を現さない。むしろ明らかに、キムチの脱ステイグマ化によって民族的な意味合いがいつそう減じられている。この詩は、コンビニ、ショーケース、グリーンサラダ、コリアンタウンという外来語を多用することで現代的な印象を与えているだけではなく、西洋起源のグリーンサラダと「同じ棚」に置いてあるという描写によってキムチを健康食品としてラディカルに再解釈している。キムチがヘルシーなライフスタイルという文脈で商品化されている状況は、「おどろき」や「奇蹟」に相当するものなのである。

スーパーマーケットやコンビニで売られている出来合いのキムチは、おそらく宗の詩が賛美する家庭の手作りキムチほど健康的ではない。しかし丁章の詩は、コンビニのキムチの実際の健康効果のみならず、味にさえも無頓着である。日本のコンビニのキムチがはたして「本物」なのかという現実が存在した論争も言及されることもない。

「コンビニにキムチ」は、キムチを在日コリアンの日常生活の一部として描いているわけではないし、また、日本人の食生活の一部になりつつあるものとして描いているわけでもない。むしろ、日本社会におけるキムチの位置づけの変容にもっぱら焦点を当てたものである。キムチは日本人に広く受け入れられるようになったかもしれないが、キムチ・ブームが、日韓の緊張関係を緩和するのにほとんど役立たなかった事実を丁章の詩は示唆している。言い換えれば、「コンビニにキムチ」が暗示するのは、このキムチ・ブームが、現にそこにある対立にもう一つ別の次元を加えただけであり、在日コリアンが排除される社会的・経済的な環境を改善するまでには至らなかったということである。とりわけこの詩の後半で、丁章は在日コリアンが昔から変わらず従属を強いられている状態を描き出している。たしかにキムチ・ブームは起きたが、だからといって在日コリアンの境遇が良くなるのではない。この詩に

よれば、在日コリアンはブームの傍観者にすぎず、周辺化され続けることに何ら変化はないのである。

おわりに

以上論じてきたように、宗秋月と丁章の詩におけるキムチの意味合いは大きく異なっている。宗はキムチの食としての側面を具体的に述べると同時に、キムチを崇高な美の対象として描き出そうとする姿勢も表現している。「キムチ」の主題は、食べるという行為、身体化、主体化という三者の結びつきである。この詩は、朝鮮文化の神話性や母性を謳うことによって、時間を超えるような印象を持つことに成功している。

それとは対照的に、「コンビニにキムチ」の内容は明らかに男性的であり、何らかの“本質”や神秘的な力にアピールしようとはしない。語り手はキムチを自分で作って家族に食べさせる人ではない。むしろ常に消費者であり続け、宋の詩の母親がしたような食事の支度には関わることはない。自然や伝統などの“女性的な”要素とのつながり、そして実のところ祖国とのつながりもまた、はじめから断ち切られている。丁章の詩で目立つのは「商戦」や「政治」のような、男性的なものとしてコード化されているテーマや、体言止めのように男性的な技法である。

一方で、こうした相違にもかかわらず、共通点も指摘できる。それは、唐辛子とニンニクから作られた一見簡素な発酵食品であるキムチに、食品そのものとは全く関係のない何かが投影されている点である。キムチは「我々」と「彼女ら」の境界を定義づけるものであると同時に曖昧にするものでもあるし、また、過去(祖国)と現在(日本)を繋げることができるものでもある。

イーグルトンのひそみに倣って言えば、キムチについて一つ確かなことは、それが単なるキムチにすぎなかったためしは一度もないということである。

参考文献

金真須美、1996年。『メソッド』、河出書房新社。

湖池屋、2010年。「激辛ブーム再来!？」。 <https://koikeya.co.jp/news/detail/206.html>。

産経新聞〔産経WEST〕、2017年。「国内産漬物1位「キムチ」が減少傾向、昨年生産量は18年前の水準に…普及促した「桃屋のキムチの素」発売から40年、背景に何が?」。2017年3月23日。
<https://www.sankei.com/west/news/170323/wst1703230003-n1.html>。

宗秋月、1984年。「キムチ」、宗秋月『猪飼野・女・愛・うた——宗秋月詩集』、ブレーンセンター、86–87ページ。

丁章、2005年。「コンビニにキムチ」、森田進、佐川亜紀編『在日コリアン詩選集—1916年～2004年』、358–360ページ。土曜美術社出版販売。

元秀一、1987年。『猪飼野物語——濟州島からきた女たち』、草風館。

李良枝、1993年。「かずきめ」、『李良枝全集』、63–95ページ。講談社。

Alcoff, Linda. 1988. “Cultural Feminism Versus Post-Structuralism: The Identity Crisis in Feminist Theory.” *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 13 (3):405–36.

Cwiertka, Katarzyna. 2006. *Modern Japanese Cuisine: Food, Power and National Identity*. London: Reaktion.

Eagleton, Terry. 1988. “Edible Écriture.” In *Consuming Passions: Food in the Age of Anxiety*, edited by Sian Griffiths and Jennifer Wallace, 203–8. Manchester: Mandolin.

Lupton, Deborah. 1996. *Food, the Body and the Self*. London: Sage.〔デボラ・ラブトン著『食べることの社会学——食・身体・自己』無藤隆・佐藤恵理子訳、新曜社、1999年。〕

Sceats, Sarah. 2000. *Food, Consumption and the Body in Contemporary Women's Fiction*. Cambridge: Cambridge University Press.

Wender, Melissa. 2005. *Lamentation As History: Narratives by Koreans in Japan, 1965–2000*. Stanford: Stanford University Press.

Young, Victoria. 2016. “Inciting Difference and Distance in Teh Writings of Sakiyama Tami, Yi Yang-Ji, and Tawada Yōko.” University of Leeds.